



先日のピカピカ大作戦では、お暑い中たくさんの皆さまにご参加いただき、校舎内のあらゆるトイレを隅から隅まできれいにさせていただいたり、草で緑色になっていた運動場を土色になるまできれいに草を抜いていただいたり、草刈り機で草を刈っていただいたり、ありがとうございました。と同時に、子どもたちが一生懸命仕事をしてくれている姿を見てとてもうれしく感じました。これで二学期、学習を気持ちよく始めることができます。PTAの皆さま、学校運営協議会の皆さま、地域の皆さま、お暑い中本当にありがとうございました。心より感謝申し上げます。

### 子育てって・・・

#### 「子は親の鑑」 ドロシー・ロー・ノルト著

けなされて育つと、子どもは、人をけなすようになる  
 とげとげした家庭で育つと、子どもは、乱暴になる  
 不安な気持ちで育てると、子どもも不安になる  
 「かわいそうな子だ」と言っていると、子どもは、みじめな気持ちになる  
 子どもを馬鹿にすると、引っ込み思案な子になる  
 親が他人をうらやんでばかりいると、子どもも人をうらやむようになる  
 叱りつけてばかりいると、子どもは「自分は悪い子なんだ」と思ってしまう  
 励ましてあげれば、子どもは自信を持つようになる  
 広い心で接すれば、切れる子にはならない  
 ほめてあげれば、子どもは、明るい子に育つ  
 愛してあげれば、子どもは、人を愛することを学ぶ  
 認めてあげれば、子どもは、自分が好きになる  
 見つめてあげれば、子どもは頑張り屋になる  
 分かち合うことを教えれば、子どもは、思いやりを学ぶ  
 親が正直であれば、子どもは、正義感のある子に育つ  
 優しく思いやりを持って育てれば、子どもは、優しい子に育つ  
 守ってあげれば、子どもは、強い子に育つ  
 和気あいあいとした家庭で育てば、子どもは、この世は良いところだと思えるようになる

この詩を一度どこかで目にされたことがあるかもしれません。私が子育て真っ最中に初めて読んだときに「どきっ」とした詩です。

だれしも親なので、子どもの幸せを一番に考えるのは当たり前のことです。時々、子どもに悲しいことがあったり目標が到達できなかつたりすると、自分のことより心配になったり悔しい思いになったりもします。大人になるまでに何も悲しみをあじわわずに、嫌なことに出会わずに大きくなってほしいものですが、それは不可能です。でも、悲しみや辛さも含めた色んな経験こそがこれから起こるかもしれない色んな場面で対応できる力となるのではないかと思います。

では、子どもが悲しみや辛さを持ち帰った時、大人はどうしてあげたらいいのでしょうか。一番は子どもの話に、「聞き上手」になってあげることが大切なのではないかと思います。子どもは大きくなればなるほど、親からの答えは求めなくなります。ただ黙って聞いてくれることで、子どもはどうして辛かったのか、何が嫌だったのか自分で心

を整理できるようになっていきます。整理できれば、正しい行動やしてはいけなかった行動について理解できていきます。次にどうしたらいいのか自分で考えられるようになれば、子どもの自主性も育ちますよね。

詩の中の、特に後半部分、ポジティブに子どもを捉えられる子育てができれば、どんなに楽しい子育てができるだろうと思います。ちょっとした誉め言葉が子どもたちの自己有用感をあげていくのではと思うのです。

私の娘の場合、伸びたところは、やはり親の私が心底ほめたり、心底喜んだりしたことでした。がみがみと言いつけた習い事については、残念ながら伸びるどころかそっぽを向いてしまったということもあります。

子どもの「やりたい」気持ちをどう引き出してあげられるか、「やった」結果が良ければそれに越したことはないですが、上手くいかなかったときにも、「がんばった」過程を十分ほめてあげて、子どもの意欲を高めることができればいいですね。

子どもが困った気持ちを持った時は、困ったことを自分で先生やお友だちに伝えられるように導いてあげられると、子どもの力が育ちます。

「助けてあげたい。この子のために何かできることを精一杯してあげたい。」それが「親心」ですが、子どもたちの「自分で解決できる力」を育てられるように親としては「見守る」ことも必要ではないでしょうか。

子育ては、とても歯がゆく、時には子どもが苦しんでいる姿は自分のことより辛く、「何とかしてあげなくちゃ」と思います。逆に「どうしてわかってくれないの。あなたのために言っていることなのに。」と思うこともしょっちゅうです。子どもの幸せを望まない親はどこにもいないのだから、その感情は当たり前のことなのです。だけど、自主性が育っていなければ、「やらされている感」が残ったり、「依存心」が高くなったりとなんでも人のせいにしてしまうようになります。

子どもは花と同じです。花は適度な水と過重にならない程度の肥料、十分な光が与えられてすくすくと育ちます。そしてほとんどの花は、咲くべき時をじっと待っています。

水や肥料をやりすぎたらその花は枯れてしまいます。無関心であったり、咲かないと決めつけて水やりや施肥を怠ったら、おなじように花は枯れてしまいます。

子どもも同じです。子どもの個性を育み、伸ばす大切な時期に、親の子どもへの過度な期待と評価によって、子どもの自己有用感を枯らしてしまわないよう、また、過重な肥料によって子どもの自主性を失わないよう、働きかけをしてあげたいですね。

子どもの力を信じ、いつも十分な光を子どもにあててあげたいものだと思います。それが勉強であっても他のことであっても子どもはそれぞれに光る何かを持っています。咲くべき時を待つ花に、ポジティブに、次も頑張ろうと思える力を、大人である我々が子どもに与えたい力です。

何かうまくいかなかったとき、それは子どもの成長の時です。親は子どもの話をしっかり聞いて上げ、「いい経験ができたね。」「あなたなら大丈夫よ。」と声をかけてあげられると、最高ですね。ゆく先、様々な経験が自分の糧となり、挫折したときの痛みや乗り越え方を知っていれば、親の力が及ばなくなった時でも強いのです。

子どもたちのそれぞれに光る個性がたくさん花咲きますように。

何か、心配だなと思われることがあったときには、どうぞ学校にも遠慮なく相談に来てください。当然のことながら、家と学校で見せる顔はどのお子さんも違うでしょう。どちらの顔も子どもの本当の姿です。その両面から、子どもが抱えている課題にどんな風に働きかけてあげられるかを一緒に考えていきたいです。